



へば図書館さ行くべ

第三回

前回までのあらすじ

レポートを作成するため、初めて図書館を訪れたサキ。友人の助けを受け、本を探しているが…

見ればいいべき」

「あ、あった〜！」

この数字、このタイトル、レジュメに書いてあった本で間違いない。でも

「う、分厚い…これ全部読むの…？」

厚さ三センチつてところかなあ。字

は小さいし、絵やイラストなんて載ってない。

「とりあえず借りてみればいいべき」

「そっか。借りられるんだね」

「十冊までな。二週間」

いやいや、これ一冊で十分だよ…と言おうとして、ふと気づいた。

「この辺りつて、この分野に関する本

ばっかり並んでるんだね」

「んだよ。図書館の本はみんな分類…

いわゆる、分野」とに並んでるはんで」

「へえ〜」

意識して本棚を見てみると、確かに、

ほかにもレポートに役立ちそうな本が

ちらほらと…

「あっちで待ってるはんで。ゆっくり

◆ ◆ ◆

「よし。これにしよう」

迷いに迷ってとりあえず三冊選んだ。

こんなに読み切れるか不安だけど、二

週間もあればなんとかなる、と思う。

「それで、これどうやって借りるんだ

ろう？」

「カウンターさ行く」

「わっ」

びっくりした。いつの間にか戻って

きたヒロが、私の後ろに立っていた。

たくさん本を抱えて、そのままスタ

スタ歩いて行く。

「え、待って待って」

「図書は、この機械で貸出の手続きが

できるはんで」

図書館の入り口まで戻ってきたかと思

うと、ヒロはカウンターの間にある

水色の機械の前で止まった。

「画面の貸出ボタン押して、学生証を置いて、本を置いて、こう」

慣れた手つきで学生証を出して、画

面にさわっている。機械の赤い光がす

つとバーコードの上をとおって、カタ

ン、と気持ちいい音がした。

「で、終了ボタン押して本と学生証と

レシートを取る」

最近スーバーによくあるセルフレジ

みたい。私、アレ苦手なんだけどな…

慣れなくて。

「誰にだって初めてはあるはんで。次

からは一人でできるようになるべ。た

ぶん」

ヒロにあれこれ指示されて、ようやく

貸出の手続きができた。

◆ ◆ ◆

「どうしよう……」

二週間もあれば読み切れると思ったの

は誰だ。私だ。最後の一冊が難しくて、

でも面白くて、たくさんノートにメモ

を取りながら読んでいたので、全然進

まない。気がつけば返却期限は明日に

迫っていた。

「どうしよう…」

《図書館の本まだ読んでない》

《明日までに返さないとヤバイ》

愚痴ってもどうにもならないとわか

ついても、現実逃避にSNSに

ポツポツ呟いてしまう。

「はあ…」

とにかく一ページでも進めようと、

本を開こうとしたら、急にスマホが鳴

った。

《マイライブラリーで延長すれば？》

つつく

